



飛

ば

ゲ

ム

Kevin Spring

「それで、僕はその子のことが好きになっちゃったんですよ」

「へえー」

おうおう距離を縮めてきているね。

「でもねその子大阪に住んでるんですよ」

「遠距離、ですかあ」

遠距離って日本とブラジルとかじゃないんだね。人それぞれなのだね。

「そうなんです。半年位通いましたよ大阪」

ふんふんそれでふられたんだね。

「そうなんです。ふられました」

あたしの目の前のふられ男は相変わらず隣の男の方を向いているのだが…。

で、なんでふられたの。

「そういうんじゃないって」

「なんでですか、だって半年も通ってたわけですよ」

「そーですよ。だって彼女、『遊びにおいでようちに泊まればいいよ昼間は観光でもしてさあ』

とか言うから、ね、そりゃあ行くっしょ」

で、やったのか？

「いや、そこは、そういう空気にならなかった」

おい、じゃあそこで気付けや。ってあんた隣の男じゃなくてあたしと会話しちやってるよ。

「なんでだめだったんでしょう、僕」

さあね。それはその大阪の彼女に聞かないと分かんないねえ。

『あのひと社交辞令って言葉知らないだよ』

とその女の声が聞こえてきた。ああ、やっぱ遊びにおいででもそういうことか。だよ。ね。

『そりゃそでしょ。あんなぶっさいくで面白くもない男なんで私が付きあわなくちゃいけないんだよお』

そんな感じだよ。ね、なんか。空気感が。

私は恐る恐る、はじめて目の前に座るふられ男の顔を見た。見ずにはいられなかった。男も私を見た。

そうなんだって。残念だね。がんばれ。

「そーいうーことかあー」

「え？どうしたんですか急に」

「なんか急に分かつちゃった。ちよつとへこむ」

「…よく分かりませんが、よかったじゃないですか。これで思い残すことはなく次へ、ですよ」

あたしが他のことに気を取られている間に、話題はすっかり変わっていた。だけど私の耳にはさっぱり入って来ず、なんでだろうなあと思っているうちに次の駅に着き、男は下車するために立ち上がり、目が合った。どうぞ、次。

「気のせいかもしれないんですけど、聞いてもらえますか？」

「何？まじめな話ですか？」

「まじめっちゃあ、まじめですねえ」

「たまになんですけど、家に帰ると、なんか…微妙になんですけど、物の位置が違う気がするんですよ。…ないですか、そういうこと」

「え？何ですかそれ、例えば？」

「テレビのリモコンとか、ティッシュの箱、あと冷蔵庫のもの、とか場所が違うような気が…」

「気のせいじゃないですか？」

「でもですよ、あるはずのない場所にあっても不思議じゃないものがあったりするんですよ、しかも忘れたところに。この間なんか納豆の豆粒2粒だけ窓際に並んで落ちてたんですよ」

「自分で落としたんじゃないんですか？」

「そうかもしれないんですけど、僕もそう思いましたけど、考えてみてください、あえて窓際に納豆食わないっすよね。なんか変なんですよ、とにかく」

「まあ、確かにちよっと…」

「で、気になりだしたら毎日気になるんすよ。台所で、オレ、これ洗ったっけかとか、トイレの紙こんな使ったっけかとか…」

「……」

「ちよっ、なんか言って下さいよ、気のせいだとか」

「ヤバいですね、それ」

「まじっすか？」

「きみ、前を見たまえあぶないよー。まあきみの後ろには…」

「え？やめて下さいよ、そういうの。あっすみません」

ち。くそリーマン。あああー、セックスしてーなー。おもしれーことなんかねーかなー。

「悪いけど、あなたの歌は、オナニーそのものだね」

と、後ろから会話の端が聞こえた。全く面識ないんだけど、後ろにいたもんだから、自分がそんなふうに言われたような感じがしてムカついた。てめえはどうなんだ、と。せめて言った男の姿がどんなだか見てやろうと、わざとゆっくり歩いて、やや強引に顔を確認した。うわっ。やっぱり。この客観性ゼロ野郎。お前が言うのか。お前こそオナニーに違いない、と私は確信した。でもって言われていた方も、ああ、だよねと思わざるを得ない雰囲気。姿を見てしまったら、この人たちの音楽を聞いてみたくてたまらなくなかった。こういう奴らは、あえて変な人になることにはかなりの情熱を注いでいる。目指せナチュラルに変な人、なはずだから、変な人を変な人だからという理由で拒むことをかっこ悪いこととしている。ましてや一人じゃなかったら、変な奴来て、普通に接せられなかった方が負け、だっせーってなるに違いない。

「きみたち」

考えまとめ途中であたしはもう、確信していたからとつと声をかけた。

「どっちがよりオナニー度高いか、聞いたげる」

2人は顔を見合わせて苦笑いした。あー、へんなの来たってね。ほらほら、お前らの大好きな変な奴だよ。見た目はそこらの事務員っぽいけどね。

「家帰っても暇でしょ。音楽のこと知らないけど、オナニーは知っているよ、あたし」

じりじりとどっちがだっせーか探り、少し先輩格らしき男の方が、

「いいんじゃない？おもしろそうじゃん、こんなことめったにないしどう？エルは」

える、だと？

「…いいよ、べつにいー」

と話はまとまった。男はすぐさま行きつけのスタジオとやらの電話を掛け場所を手配した。いいねえ、仕事早いねこの男。

エルと男のマスターベーション。

気に入らないことだらけだ。エルは声が小さく不明瞭で何言ってるのか分からない。男の方は声はでかいが、神経を逆なでするようなバイブレーション(ビブラート)をやたらと使う歌いかただった。

確かに。

私は歌がどうこうより2人がセックスしたらどんなだろうか、ということばかりが浮かんでくるのだ。

「どうでした？感想聞かせて下さいよ」

私は考えた。こういうとき、何と言うのが適切か。

「…」

彼らの目的にもよるな。いや、違う。私がどう感じたかを問うてるんだよね、彼らは。

「正直に、どうぞ」

「うん、そうだね、感想としては、ナイスマスターベーションって感じ。聞き心地はね、どっちもおんなじくらいイラッとした。ボールでも投げつけてやりたいかんじっていうかあんたら2人がやってる、あ、ごめんね、下品で、何て言うんだっけ、やる。っていうか、絡み合ってる様が、どーしても浮かんでくんだよね。あんたたち、付き合ってるの？」

「いいえ」

2人は声をそろえて答えた。

「あっそう。そうなの。じゃさ、やってみたら？」

2人は突っ立ったまま互いをちらちら見あっていた。おー、でてるねー、でてるよフェロモン。そのまま、そのまま。

「じゃあ、あたしは帰る」

フェロモンを間近で浴びてしまったもんだから、妙にむらむらしちゃってあたしは風俗店に入った。

「お仕事したいのかな？」

と聞かれ、

「いやいや、客として来たんだけど」

と答えると、

「うちはレズはやってないから、専門店行ってもらえる？」

「あたしレズじゃないですよ。なんなら、あの、とりあえず客でも店員でもどっちでもいいんだけど、やれれば」

「ええ？」

「あんたでもいいや」

で、あたしはその風俗店の店員と事務室でやってたわけ。やべえ、いくわって思ってたら超ドMっぽい女が入って来て目が合ったんだよ。

もうあんなことやめよう。いつかばれる。ばれたら喜んでくれるかなあ。我慢できないよ。悪いことだってわかってる。でも、やめられない。頭がおかしくなりそう。大丈夫クローゼットにはお守りが入っているから大丈夫。でも今日は大丈夫でも明日はわからない。明日にはさみしさが襲ってくるかもしれない。そんなことばかり考えているわたし。あ、こんにちは。ありがとうございます。お客さんって言うのもなんかあたし嫌なのでニックネームでもいいので名前教えてください。はい、タロウさんですね。どうしようあたし本気になっちゃうかも。あ、ごめんなさい。はい、分かり…分かったわタロウ。ああ、こっちか。お店間違えてるよもう、女王様のところ行ってよ。私言っちゃいけないこと言わないようにうまいこと罵るなんてできないよ。ほらタロウ、なにもたもたしてるの脱ぎなさい、その生乾きの臭いたっぷりのぞうきんみたいなシャツを。あ？え？今のは、NG？わかんないよ。このブタ。罵りの定番だよね豚って。そうだよあたしが言われて気持ち良くなること言えばいいんだよね。うーんでも男の人だし。ごめんなさい。あ、いえ、うるさいタロウ、おだまり、静かにおし。変な声出すな。キモイ。汚い。臭い。バカ。え？もっとなにー？へんたい。え？違うんですか？すみません。あ、でも私はさっきのはそんなふうに全然思っていないですよ。そういう感じが好きかなって思ってそれで思ってもないこと並べて口に出しただけなんです。…はい。わかりました。……。ありがとうございました。また絶対来て下さいねタロウさん。ああ、なんか疲れた。明日は休んでどこかの家に行こう。お疲れ様でした。お先に失礼します。はい、それじゃ明後日に。今日の稼ぎなんだか一気に使いたくなった。ラッキー。最終間に合う。うわっ。あの人超いい男。やばい、尽くしたい。

「お父さん、もう帰ろうよ。開斗もうあきたって」

お父さんはいつも来たばかりの時はやさしくて笑ってるけど、帰るときはいつもほとんど怒ってます。勝つと機嫌がよくて負けるとすごくこわいです。ときどきぼくがうるさいとぶったりもします。だから負けるとぼくも悲しいです。ぼくはやさしいお父さんが好きなので、勝ってほしいです。けい馬場には屋根がついた小さいお家があってそこに人がいっぱいあつまっています。中にはたいていおじさんがいて、どの馬が勝つか教えてくれるんです。みんなの前で一人しゃべるおじさんはかっこいいです。だからぼくは大きくなったらおじさんみたいなヒーローになりたいです。それで、お父さんにだけこっそりどれが勝つかを教えてあげたいです。

思ったように素直に書きましようって先生は言うけど本当にそう書いて出したらどうなるかわからないぼくにも分かっているんだ。ぼくは考えた。誰も傷つけないで怒らせないこと、ほんのちよつとのぼくらしさもわすれない、そういうことだ。開斗はもうくたびれてしまったようで座り込んでしまった。お父さんは新聞を見るのに夢中でぼくたちのことをわすれてるみたいだ。地面には紙がいっぱい落ちていた。誰もそれを拾わなかった。お婆さんたちがやって来て一斉に紙を掃除した。重いなあと思ったら、開斗はぼくに寄りかかったまま眠ってしまった。ずるいよ。ぼくだってもう疲れたしあきたし、お腹も空いたし家に帰りたい。

「お父さん、開斗寝ちゃったよ。もう帰ろうよ」

ぼくは何度もお父さんのズボンを引っ張ってそう言ったけど、すごくいらいらしてるみたいで、あとでな、駿ちよつとここで待ってろしか言わなかった。お父さんはあの目になっていた。あの目のときはぼくたちのお父さんではなくなるんだ。開斗はぼくが声をかけても起きないし、お父さんは人がいっぱいいるところに行っちゃうし、すごく一人ぼっちだなって思った。このまま置いていかれてあの怖そうなおじいさんに連れて行かれてあの人の子供になったらどうしよう。おじいさんはなにか大きな声で言いながらぼくの前を歩いている。ぼくはおじいさんに見つからないように一生けんめい下を向いた。どうかぼくが見えませんように。こわいおじいさんの目に映りませんように。大きな人の気配がする。ああ、見つかってしまった。あつても開斗は？知らない子のふりしようかな。ぼくはそろそろと顔を上げた。あ。おまわりさんだ。黙ってぼくと開斗を見ている。

ああ、私には弟がいたなあ。いや、実際にはいない。ただふと、目を開けると、ねえ兄さん、と語りかけてくる男が私にはいるのだ。ほんの断片だ。私が弟などいないと思うに至るまでのほんの隙間には私は若くも年老いてもいない女であり、私はこんなに若いのだと思った瞬間、私になるのだ。戻る、というのとは少し違う。まるでいくつもの人物がかけもちで存在しているような。それがすべて私のような。しかし困った。それらはてんでばらばらなんだ。若くもない女は、安全で効果の期待が大きい整形を施そうとし、一人はつらかったと元旦那に言う。いやタキシードを着た紳士は私の方だ。…何を言っている。この断片はなんだ。弟がいる私は誰だ。若くも年老いてもいない年齢のことばかり気にしている女は？顔をいじった女は？一人はつらかった女は？タキシードを身にまとった紳士は？今の私の姿に惑わされてはいけない。私の肉体が初老の男だというだけで判断するのは安易ってもんだ。さあ、私は誰だ？断片を集めてつなぎ合わせて私というものにするか。それで満足か。そうなのか？できそこないの愚かなつぎはぎ人間にすぎないなあ、それでは。断片が現れたらその都度つかまえて味わいつくすか？ああ、それは我ながらなかなかいい考えだ。暇つぶしにはもってこいじゃないか。だが待て。それほど断片は現れるのか。現れないとしたならばやはり私はただ肉体によってのみ判別するのみの身。初老の男。というわけか。はっはっは、お笑いだ。愚かだ。くだらない。このばかばかしさを表現できる言葉などないな。ゴミのかけらを捕まえて味わう。そんなことをできるわけがない。なんといつてもゴミなんだからな。ああ、昔はよかった。いや、なにがよかったっていうんだ。私にいいと語れる昔などあるだろうか。少しは考えてからしゃべれ。いやしゃべっていないんだからな、これはどういうことだ。どこからこの思考はやってくる。例えば昔はよかった。と。私は取引をしたんだ。いつだったか都会の街中で。そうだ、私はかつてはこんな人間ではなかったのだ。ほんの面白半分が今ではすっかり虜。とりこ？いやそうではない。利用しているのだ。それで私は構成されている。抜け出せない。好きでやっている？騒がしいな全く。鳴りやむことはないな。それでいい。何かを語りざわざわとしているのが好きに違いない。そうだ、これはきみにあげよう。私にはもはや必要ない。

飛ばしゲーム

<http://p.booklog.jp/book/85554>

著者 : Kevin Spring

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/kevinspring/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/85554>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/85554>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブクログ